

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山本成生

本論文は、15、16世紀の西欧で最も優れた音楽拠点の一つに数えられる北フランスのカンブレ大聖堂に焦点を当て、その聖歌隊を構成した人々とそれに関わる組織が13～16世紀の間にどのように変化していったかを検討したものである。第一章から第三章にかけて、音楽拠点研究の動向、カンブレ大聖堂の歴史的背景、史料状況を紹介した上で、第四章から最後の第八章にかけて、史料を使った詳細な分析がなされている。第四章では聖堂参事会の音楽保護政策が、参事会員代理職設置の経緯も含めて検討され、第五章では「音楽家参事会員」の実態が明らかにされている。さらに、第六章でカンブレ大聖堂の聖歌隊組織の中核を担っていた参事会員代理たちの実態を詳細に検討し、第七章で少年聖歌隊の形成過程、そこに属する少年たちになされた教育と彼らの実態を探り、第八章で少年聖歌隊員の指導に当たっていた少年聖歌隊教師の採用基準がどのようなものであり、どのように変化してきたかを検討している。

本論文の最大の長所は、未刊行史料を含む膨大な量のラテン語史料を検討して、カンブレ大聖堂参事会の実態、少年聖歌隊の形成過程とその実態を明らかにしている点である。史料から出されたその豊富な情報は音楽史研究に限らず、教会史研究、とりわけ、聖堂参事会研究に大きく貢献することになると思われる。審査委員会においては、議論の予備的考察部分を圧縮すべきこと、議論をより明快にするために論文の構成にいつそうの工夫が必要なこと、ラテン語史料に記されている特殊用語に対する日本語訳にもう少し工夫が必要なこと、いくつかの概念の定義をより明確にすべきことが指摘されたが、先行研究を周到に検討し、種々のラテン語一次史料に基づいてなされた議論はきわめて水準の高いものであり、博士論文として十分満足できるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。